

## 審査の結果の要旨

氏名 李 梨 花

本論文は、和辻哲郎の倫理学体系における、「国家」論の人倫的意義を解明する試みである。国家論は和辻の主著『倫理学』の重要なテーマであるが、戦前・戦中の国家主義イデオロギー問題との関係もあって、これまでの和辻研究はこれを選けて通る傾向があり、倫理的見地から直接和辻の国家論を扱った研究は少ない。本論文は、和辻においてなぜ国家が、普遍的な道の自覚が実現される最大の場所とされたのかを、和辻倫理学の「日常」および「空」の概念の吟味を通じて明らかにしたものである。

第一章では、和辻の「日常」概念が吟味される。和辻は、道の超越性を否定し、あくまでも日常こそが道の実現態でなくてはならないと主張する。論者は、和辻のいう日常が如何なる意味で、道の実現される動的な場としてのあり方を確保しえたか、そしてまたなぜ道の実現運動には、日常の実践的な了解にとどまらず、理論的認識（自覚）が必要とされたのかを検討する。その結果、和辻のいう自覚は、単なる事実認識でも、また宗教的な悟りへの飛躍でもなく、それ自身が、実践的了解を道へと向かう運動にもたらす不可欠の契機であったことが示される。すなわち、和辻のいう日常は、通常の意味での常識的立場ではなく、理法に無自覚な凡夫と、倫理を自覚した覚者とを構成員とする質差を含んだ動的な領域であったことが明らかにされるのである。

第二章、第三章では、和辻倫理学の根本発想である「空」の弁証法が、『原始仏教の実践哲学』をてがかりに詳細に検討される。和辻の道の論は空の思想に多くを負っているが、しかし、存在と当為の関係づけをめぐる、和辻と仏教は顕著な立場の違いを見せる。ここでは、仏教思想が凡夫の道への欲求の根拠を覚者の權威に帰せざるをえないのに対し、あくまでも感動の論理的根拠づけを目指したところに、和辻の空の思想の独自性があったことが示される。すなわち、日常の行為連関に道を見る和辻においては、覚者の悟りはそれ自身が他者との関わりとして現れねばならず、それが慈悲という目に見える行いであるとされる。そして、慈悲とそれへの応答としての感動との動的な関係が、和辻のいう日常における空の実現態であったことが明らかにされるのである。

第四章では、空の実現の現実的な範囲としての「国家」が検討される。論者は、国家論の諸類型に対する和辻の批判を検討した上で、和辻のめざした国家が、アショーカ王の国をモデルとしていることを示し、道の実現態としての運動連関には、道を自覚し提示する覚者と、それに帰依する素朴な凡夫との関係の他に、その関係を認識する立場（学、懐疑の心）が含まれねばならないこと、これらすべてを構成員とする領域は、了解・感動が可能となる最大の「特殊」としての国家であることが示される。

以上、本論文は、和辻の人倫国家の意味を、和辻倫理学の基本発想と方法的基礎の精密な解析を通じて明らかにしたものであり、従来手薄であった和辻国家論の理論的解明に一定の成果をあげている。論証は精密で、先行研究への目配りも行き届いている。ただ精密な反面、論述にやや重複が目だつなど問題がないわけではない。とはいえ、和辻倫理学の基本モチーフを新たな視点で根拠づけたことの意義はきわめて大きい。

以上により、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。